〈修士論文要旨〉

遺跡の開発と保存を巡る地域的諸問題

―― オオヤマト古墳群を事例として ――

藤　原　嘉　弘*

(1) 本研究の目的

1970年代における全国の遺跡保存と開発を巡る事例は、『埋蔵文化財白書』から統計データとして取得可能であり、遺跡保存に至ったものはそれぞれ市民主体による遺跡の保存運動があったことが分かった。しかし、その資料は古く近年における1980～2000年代の遺跡保存事例の統計データは白書としてまとまっていなかったために1980年代以降の遺跡破壊データは入手不可能であった。

そこで、独立行政法人奈良文化財研究所ホームページの遺跡データベースから遺跡の破壊事例の検索を試みたが、全国における詳細な破壊事例は数件しかみつからなかった。更に白書以外の資料として全国の各地方自治体が刊行している『埋蔵文化財発掘調査報告書』なども調べたが、遺跡が保存又は破壊されたのかの全国の実態は把握できなかった。しかし、その中でも奈良県については、遺跡の破壊事例が数箇所あることがわかった。

近年の奈良県において市民による遺跡保存運動が現在も続きまだ遺跡が破壊されていない事例として、奈良県天理市の萱生・佐保庄・乙木地区に分布するオオヤマト古墳群地域があり、県道「天理環状線」開発を巡る問題が生じていることが分かった。それ故、本稿では更に具体的な対象地域としてこの地域を選定し現地調査をした。

本研究では、奈良県天理市における遺跡の保存と開発を巡る問題に焦点をあて分析する。具体的には、オオヤマト古墳群の保存と県道「天理環状線」道路建設計画による開発を巡る問題に対して対象地域の住民がどのように捉え対応してきたのかを、実際に現地調査をおこない明らかにしたい。

(2) 研究の方法

本稿では、天理市におけるオオヤマト古墳群の保存と開発に関するアンケート調査結果に統計的解析をおこない、地域住民の意識とその対応を考察した。

まず、2004年夏期休業前に天理市の対象地域内に点在する古墳群と道路建設予定地付近に居住する地域住民に対して、ヒアリングによる古墳群の保存と「天理環状線」に関する予備調査を実施した。

平成16年度　*文学研究科地理学専攻

そして、本調査では、古墳群周辺の地域住民とそれ以外の居住者に対してオオヤマト古墳群の保存と「天理環状線」建設に関するアンケート調査を200人におこなった。対象地域に居住する住民の方から思ったよりも回答数を得られず、再調査でアンケート回答を約70通補った。

更に「天理環状線」建設反対団体への意識調査もおこなった。オオヤマト古墳群シンポジウム実行委員会16団体に対してe-mailでのアンケート調査及び代表者に対してヒアリング調査を実施した。反対に至った経緯など詳細な反対理由を明確にききだすことがねらいである。

(3) 研究成果

本稿では、奈良県天理市におけるオオヤマト古墳群の保存と県道「天理環状線」道路建設計画による開発を巡る問題をとりあげ、文化遺産の保存と開発に関して、行政政策の問題点を指摘し、地域住民がどのようにこの問題を捉え対応してきたのか実際に現地調査をおこない明らかにすることを目的とした。

第1章では、研究課題と分析法を説明し、第2章では、考古学情報の本質から保存の重要性を説明した。また、遺跡は、文化遺産でもあり、この点から保存問題がまちづくりや都市計画問題としても解決できる可能性を示した。保存事例としては少ないが、遺跡の破壊から保存に変化した2つの事例を紹介した。第3章では、おもに、奈良県と天理市の開発姿勢を分析し、奈良バイパス問題とはことなり、古都保存を重視した都市計画マスタープランの2種類の事業（伝統的建造物群保存地区・歴史的地区環境整備街路事業とまちなみ環境整備事業）は、歴史的景観保存を重視するため天理の「天理環状線」整備事業には適用されていないことを指摘した。この地域の開発が、地方特定道路整備事業として実施されている背景には、最初からオオヤマト古墳群の保存を無視した県の開発姿勢が窺えると言える。

次に、住民の意識についてアンケート調査を行い、実験計画法を移用して、住民の潜在意識をオオヤマト古墳群を知っているか否かという認知因子と開発か保全の判断因子にわけ、性別、地域別に分析した。その結果、性別は、認知と判断因子に強く関係するが、地域別因子は、認知よりは、判断因子に関係が深いことを示した。このことは、判断において直接関係する地域住民とそれ以外では、異なったパターンが見られることを示している。

天理市の対象地域内に分布するおおやまと古墳群周辺に居住する地域住民に約200通のアンケート調査を実施したが、今後の研究課題として、更に研究の幅を広げまちづくりへ意思を反映するためにはより多くのアンケート調査をおこなう必要があり、対象地域に居住する住民の方にアンケート調査をおこなうことが理想である。地道な足をつかってより多くのアンケート回答者を獲得していく努力が更に必要であることが今回のアンケート調査で分かった。